

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

助教 福田 京佑

1. 教育の責任

理学療法士養成の現場は、近年の全国的な基礎学力の低下や、理学療法士の質のばらつきに対する懸念を背景に、より実践的かつ多角的な教育が求められている。山梨県には本学と他1校の理学療法士養成校が存在し、地域的にも学生の多様性を反映した教育が必要である。私は健康科学大学リハビリテーション学科において、主に3年生を対象とした「義肢装具学実習」を担当している。本科目は、臨床医学系の知識を基に、切断の原因、義肢の構造・調整、装具使用、そしてそれらに関する理学療法の実践的知識を教授することを目的とする。

2023 年度

科目名	時期		受講者
義肢装具学実習	3年後期	必修	62名

2024 年度

科目名	時期		受講者
義肢装具学実習	3年後期	必修	54名

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 学生募集委員会
- 2) 研究・動物実験委員会

2. 教育の理念・目的

本学は、様々な総合的問題に立ち向かうことができる問題解決力を備えた人材」を養成するため、「豊かな人間力」、「専門的な知識・技術力」、「開かれた共創力」の三つの教育目標を掲げている。理学療法教育においては「主体的に学び、他者に貢献できる理学療法士の育成」を理念に据え、知識の習得のみならず、実践的判断力と人間力の涵養を目指している。特に義肢装具学実習では、疾患・障害の背景を理解し、理学療法士としての倫理観と臨床応用力を持つ人材の育成を志向している。現代の学生は多様な学習スタイルを持つZ世代であり、一方通行の講義ではなく、対話的・協働的な学習環境を整えることが不可欠であると考えている。

3. 教育の方法

「義肢装具学実習」では、以下の4点を中心に教育設計を行っている。

1. グループワークとディスカッションの導入：学生は4～5名の小グループに分かれ、

義足や装具の適応条件、姿勢・歩行分析などを臨床想定課題として取り扱う。各自の事前学習を基にディスカッションを進める中で、情報の取捨選択や他者との意見調整を通して、課題解決に必要な視点を養う。教員はファシリテーターとして介入し、議論が深まるよう支援している。特に、歩容分析や装具処方判断基準などは、実際の症例に即した内容とすることで実践的な学習効果を高めている。

2. 実技・演習の重視： 下腿義足や大腿義足のアライメント調整、装具のチェックアウトなど、実物モデルやデモンストレーションを活用して学習する。学生同士で観察・調整を繰り返すことにより、操作手順だけでなく、「なぜその調整が必要なのか」といった臨床的判断を言語化し共有することを促している。動作観察や装具の構造把握には、講義中に提示する図解資料も併用し、視覚的理解を支援している。
3. フィードバックの活用： 各回の講義では復習プリントを配布し、学修の進捗を可視化すると共に要点を理解できるよう促している。また、複雑な義足パーツの説明や異常歩行のメカニズムなどでは、図や動画を用いて再説明を行い、反復学習を促している。また、グループワーク後には簡単な口頭共有の時間を設け、他グループとの学びの比較を通じて視野の拡張を図っている。
4. Microsoft Teams は主に資料の配信や連絡手段として使用しており、講義資料の事前共有や補足資料の提供により、学習の個別最適化を図っている。

4. 教育の成果・評価

2024年度前期に実施した義肢装具学実習では、15回の講義および演習・実技を通じ、以下の評価項目を設けた。本授業における学生の評価は、期末試験によって総合的に行われている。試験問題は、シラバスに記載された各行動目標に基づいて作成しており、次の観点に分類される：

- 知識・技術力（50%）：義肢や装具の種類、構造、適応、使用方法などの基礎的理解を問う問題を通して評価する。
- 思考・推論・創造する力（30%）：臨床的課題に対して、義足・装具の選定理由を説明させたり、異常歩行の分析を通じて適切な支援方法を導き出す課題により評価する。
- 問題を発見・解決する力（20%）：特定の臨床状況を提示し、その中で装具介入の適応可否や代替手段を論理的に導き出す力を問う。

このように、単なる知識の再生にとどまらず、臨床現場で必要とされる思考力や判断力、問題解決能力を重視した設問構成とすることで、教育の目的に即した評価を実現している。試験実施後は、学生の得点分布や設問ごとの正答率を分析し、理解が不十分であった項目についてはフィードバックを行う。また、試験返却時には解説時間を設け、再度重要な概念を視覚資料や動画を交えて説明することで、試験を通じた学習の定着も図っている。さらに、授業評価アンケートでは、「現場に即した内容で理解しやすい」「実技を通して自信がついた」との肯定的な意見が多く見られた。「現場に即した内容で理解しやすい」「実技を通して自信がついた」との肯定的な意見が多く見られた。一方で、「資料の分量が多く復習が大変」「グループワークで発言しにくい」といった課題も挙げられ、これらに対しては次年度以降の改善策を検討中である。

5. 今後の目標

■ 短期目標：

- ・授業後アンケートのコメント分析に基づき、配布資料の簡素化および要点整理を行う。
- ・グループワークのファシリテーション力を向上させるため、学生役割の明確化とルーブリックの導入を検討する。

■ 長期目標：

- ・義肢装具学分野におけるシミュレーション教材の開発。
- ・地域リハビリテーション施設との連携による見学・実習機会の創出。
- ・学生が主体的に学び、臨床において即戦力となる教育モデルの確立。